

秋高し

加藤 慶 子\* 埼玉

もみ殻を燃やすにおいが真つ先に迎えてくれるふるさとの径  
いもの葉にきらめく露はころころと兎らの見つめる小さなまなこ  
自動ドアに映れる白き雲の峰ふたつに裂きてわれ入りゆく  
噴水のひとり芝居を観るベンチ一羽の鳩がそばに寄り来る  
秋高し半端切手を寄せ集めぺたぺたと貼る友への手紙

椎の実

上野 隆 紘 千葉

公園に連日唸る送風機尽きぬ落葉を吹き寄せむとて  
ビオトープの桐の葉なべて散りたれば日差しあまねしその下生えに  
目にとまる落葉溜りを蹴散らかすをさな心の失せざるわれは  
公園の椎は今年は生り年であまた散りぼふ艶よき落実  
拾ひ来し椎の実食ひて見せやれば「マジか」と目を剥く十九の男孫

夜の海

大西 淳 子\* 千葉

霧雨が彼岸、此岸の境界をあいまいにしして夜の海に降る  
波音に雨音まじり目つむれば無重力なるわれのたましい  
シーサイドホテルの椅子は海に向き声はときどき独白となる  
晩秋の浜辺を歩き美しい貝殻のその末期まっごをおもう  
集いたる義父の十七回忌にてわが蛍子を語るひとなし

泡立ち加減

石原佳子

神奈川

素枯れゆく風船かづらに絡み咲く紅べにの小花よ縷る紅草こうそうの秋  
乗り鉄の孫の歌載るわが歌集紅き付箋をつけて送りぬ  
微笑まし入社四年の乙女子がLINEに〈弊社〉と記すを読めば  
ご近所の天使の喇叭が二度咲きすわれの歌集のなかにも咲くを  
全自動洗濯機でもついのぞくその日その日の泡立ち加減を

ラッシュ時の空

佐藤

玄 神奈川

羽田発西行き宵のラッシュ時の空見上げたり施錠に出でて  
赤、緑、白のライトの密集が幾つも宵の空航わたる見ゆ  
今日もまた十九時二十五分なりデネブをかすめ行く十字の灯  
秋の夜の空を運ばる三百の人ら籠中のいのちとなりて  
ひそやかに冬の星々宴うたげせり空のエンジン音絶えし夜半

ワタクシは無事

内山 真由美

新潟

先月はボイラー今月はパソコンと故障続くもワタクシは無事  
新潟は「米」だけぢやない解禁日待つてゐましたルル「ル・レクチェ」  
倍速の視聴に慣れた世代には対面授業は〈タイパ〉が悪い  
ユーチューブばかり見てゐる小学生変なりズムで語りはじめ  
ATMに並ぶ人びと自動ドアの向かうは行員のみが佇む

さくら海老

榛葉貞代 静岡

二艘船の曳き網なればお互ひの胴合はせ待つさくら海老漁船  
夜六時禁漁解けし由比港のさくら海老漁船競ひつつ出づ  
体長は三センチ髭九センチ鬚に発光するさくら海老

さくらばなのさくら色なる海老のせて漁船が帰る白き波曳き  
柄をつまみ鈴ふるやうに貰ひたるさくらん坊は二人づれなり

秋草の道

水辺あお静岡

裏山の肩隠しゆく朝霧の冷たき秋に入りにおけるかも  
わが足に踏まるる秋の草花がわが足裏を押し上げてくる  
頭を下げて挨拶せしに頭を上げて応へられたり秋草の道  
その先で何が待つかは知らねども冬枯れ続く脇道に入る  
ひんがしの海の彼方の大国の長が決まりぬうねり来る波

素数×素数

森田治生 三重

春先に買ひし絵はがき「手袋を買いに」がやつと使へる冬だ

このたびは山は動かず久々に与党が過半数を割れども

蜂鳥に似てゐるねつて孫が言ふホバリングする大透翅おほすかしばに

鱗船玉貝うろふねたまがひのごと鉄の鱗で身を守りたきこともまあり

素数×素数は素数になりません ふたりで暮してもう半世紀

泣きたくて

藤岡成子 兵庫

すずめらは湯浴みするごとにぎにぎと金木犀の香の中にある  
三反のコスモス畑に四、五本のひまわり咲いて主役の風情  
感情の動かぬことこそさびしけれ泣きたくて観る失恋映画  
ほら話得意な人ほど人気者、恵比須さんよりいい顔をして  
饒舌な老いほどさびしがり屋にてうはさばなしを空へと飛ばす

おほきなキャンバス

栗山由利 福岡

ここはまだてつぺんぢやない朝顔と小二の孫の終はらない空  
ながながとゐすわつた夏の雲さりて空がおほきなキャンバスになる  
信号でいちばんさきに駆けだした就活スーツを秋風がおす  
あんパンにかたむくトングをひきもどし塩パンひとつトレイにのせる  
転がしてみても食べても昔より小さくなつたなサイコロキャラメル

癖になるかも

立石千代女 長崎

とてとてと歩く一歳急くときはハイハイでゆく二刀流なり  
最終日は大栗田をまはるらし見捨てられたるやうに閑かだ  
ひとり酌む酒にゆるびて歌生まるこいつはちよいと癖になるかも  
目の前のかほと十五の頃のかほやつと繋がる古希同窓会  
選評に「矜持」と書けば新聞に使へぬ字とて「誇り」と変へらる